教皇様の声

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticano の転載許可済
©1982 精道教育促進協会 ☎(芦屋)三二・三四五二 芦屋市船戸町12—6

聖母の奥義
ロザリオの祈り

今日は、みなさんとご一緒に、ロザリオの祈りの単純で深い意味について少々考えてみたいと思いました。聖母は、とくにこの祈りをするようにと呼びかけ、促し、また励ましておられます。ロザリオの祈りを唱えると、イエズスのご一生の奥義に入りこむことができます。ところで、ロザリオは御母の奥義でもあります。この点がはっきりわかるのは、とくに喜びの玄義を唱えるときではないでしょうか。喜びの玄義は〈お告げ〉にはじまり、エリザベト〈ご訪問〉、ベトレヘムの夜の〈主のご降誕〉、さらに、〈主の奉献〉から、十二歳になられた〈イエズスが神殿で見い出される〉までを含みます。悲しみの玄義においては、おしまいの二玄義、〈十字架の道行〉と〈十字架上のはりつけ〉を除いて、一見したところどの玄義も、直接イエズスの御母にかかわりあるとは思えません。しかし、御独り子が、〈ゲッセマニの園であのようにひどく悲しまれた〉ときや〈柱のもとでむちうたれた〉とき、また、〈茨の冠をかむせられた〉ときに、霊的にではあれ、御母が御子につきそっておられなかったなどとはどうしても考えられません。ついで、栄えの玄義、これもキリストの奥義を表わしていますが、まず〈ご復活〉のとき、マリアさまは、御子のそばに、霊的にいらっしゃいます。聖書によれば、〈ご昇天〉のとき、その場にマリアさまが居合わせたかどうかはわかりません。しかし、ご昇天のすぐあと、キリストを見送った使徒たちと共に、マリアさまが高間にいらっしゃったと聖書が記しているのですから、ご昇天のときにはいらっしゃらなかった、とはどうしても考えられません。マリアさまは、使徒たちとともに聖霊降臨の準備をし、ペンテコステに参加されます。最後の二玄義、聖母の〈被昇天〉と天国での〈ご戴冠〉は、直接、神の御母に注意を集中して黙想する玄義となっています。

ロザリオは、キリストの救いの使命に協力する〈マリアさまについて〉の祈りであり、御子への最高の取り次ぎ手としての〈マリアさまへの〉祈りですが、それだけでなく、さらに、聖霊を受ける準備のために聖母マリアと高間で祈っていた使徒たちのように、とくに〈聖母といっしょに〉唱える祈りでもあります。

闇の力と戦う

聖パウロのエフェゾ人への手紙の終わりには次のようなことばが書かれてあります。「主において、力をうけ、その力によって自分を強めよ。悪魔のくわだてに刃向かうために、神の武具をすべてつけよ。私たちが戦うのは血肉ではなく、権勢と能力、この世の闇の支配者、天にある悪霊だからである。だから……信仰の楯をとれ、それによって、悪者の火矢をすべて消すことができるであろう。……すべての祈りと願いとをもって、心のうちでいつも祈れ。たえず目を覚して、忍耐づよくすべての聖徒のために祈れ。また私のためにも祈れ、福音の奥義をおそれなく告げようとして話すとき、適当なことばがくだされますように。私は、〔福音〕の使者として鎖につながれている。私が語らねばならないことをおそれなく語れるように〔祈れ〕。〈エフェゾ6・10～20〉

（昨年十月の最初の謁見で）私は、みなさんへの感謝の心をあらわすために使徒行録のことばを引用いたしました。「ペトロのために、教会は、たえず神に祈りつづけていた」からです。福音宣教の務めを再び続けることができるようになった今、エフェゾ人への手紙のことばを借りて（聖パウロのように、）私のために祈りを続けてくださるよう重ねてお願いします。この祈りは真理と愛の務め、教会のために果す務めであり、世界中のための務めといえましょう。エフェゾ人への手紙の筆者は、この真理のための務めは、〈悪霊〉や〈この世の闇の支配者〉に対しての戦いでもあると言っています。戦い、それも決戦なのです。

たえまのない戦い

第二バチカン公会議は、現代世界憲章「ガウディウム・エト・スペス」の37番で、この戦いについて、次のように述べています。

「やみの権力に対する苦しい戦いは、人類の歴史全体に行きわたっている。それは世の初めから始まったものであり、最後の日まで続く、と主はおおせになる。この戦いに巻きこまれている人間は、善から離れないために戦わねばならず、神の恩恵の助けと大きな努力なしには、自己の統一を実現することもできない。したがって、キリストの教会は、創造主の計画に信頼して、人間の進歩が人々の真の幸福に役立つことを認めるとともに、『この世に従ってはならない』（ローマ12・2）という使徒のことばをくりかえして叫ばざるを得ない。ここで言うこの世とは、神と人間との奉仕に定められている人間活動を、罪の道具に変えてしまう虚栄と悪意にみちた精神を指している。」

さらに公会議は、次のようにも教えています。「どのようにすれば、このように不幸な状態を克服できるかと問う人に対して、キリスト者は、高慢と乱れた自己愛によって毎日危険にさらされているあらゆる人間活動を、キリストの十字架と復活によって清め、完成に導くべきであると答える。」（同上）

> **ロザリオは、マリアさまについての祈りであり、マリアさまへの祈りですが、それだけでなく、とくに聖母といっしょに唱える祈りでもあります。**

神のご慈悲により試練を乗り越え、今一度務めに戻った私は、みなさんに、聖パウロのことばを使ってふたたびお願いいたします。「私のために祈ってください、福音の奥義を

おそれなく告げようとして話すとき、適当なことばがくだされるように。……」

生きるも死ぬも

私自身、暴力の被害をうけたおかげで、世界のどこかで、なんらかのかたちで、キリストのみ名のために迫害を受け、苦しんでいる人々と、以前にもまして強く心を一つにすることができました。人間とその尊厳、世界の正義と平和を守らんとするがために、抑圧されつつたえる人々にも、一層近づくことができました。ついには、死をもって忠実な一生を全うした人々とも、深く結びつくことができたと申しあげましょう。

このような人々のことを考えながら、ローマ人への手紙にある使徒のことばを繰り返すことをおゆるしください。「私たちのうちだれも、自分のために生きる者はなく、自分のために死ぬ者もいない。私たちは、生きるのも主のために生き、死ぬのも主のために死ぬ、生きるも死ぬも、私たちは、主のものだからである。はたして、キリストが死んでよみがえったのは、死んだ人々と生きている人々とを支配するためである。」(一九八一・十二・二十八)

仕事の世界

真理と正義の世界を！

憎しみではなく、愛の躍動によって

パンと自由と真理への渇望

人間の〈仕事の世界〉は何よりもまず〈倫理的な力〉を基礎としなければなりません。〈憎しみ〉ではなく、〈愛〉の世界、破壊を招くのではなく、建設的な世界であるべきなのです。仕事には、人間の、家族の、国家の、そして、人類の諸権利が深く刻みこまれています。世界の将来は、それら、もろもろの権利を尊重するかいなかにかかっているのです。

こんにちの仕事の世界の根本問題は、〈正義〉でも、〈社会正義のための戦い〉であってもならないというのでしょうか。そうは言っていません。人間の仕事というものをこの権利や戦いから切り離すことはできないと言いたいのです。

聖母のご訪問の祝日の典礼は、この点について何を語っているでしょうか。神の御子を宿された聖母のおことばには、〈神の正義〉と(…)神礼拝とがふくまれているのではないでしょうか。「その御腕の力をあらわし、おごる思いの人々を散らし、権力者をその座からおろし低い人々を高め、うえた人をよいもので満たし、富む人を空手でおかえしになります。」(ルカ1・51～53)

聖母のおことばを読むと、〈正義にかなう世こそ神の望み給うた世界〉であることが明らかになります。人間相互の関係を律する秩序は〈正義〉であるべきなのです。この秩序は社会において常に実現されねばなりません。それば かりか、社会状況や社会機構の向上発展に伴い、あるいは、「新しい条件」や経済的可能性、技術や生産の新しい可能性に伴って、常に新たに実現されるべきなのです。同様に富の分配も、新しい可能性や必要性に応じても、この秩序は実現されるべきことは言うまでもありません。

「主が私に偉大なことをなさった。」マリアの〈マニィフィカット〉のなかのこの言葉は、すばらしいことをしてくださった神への感謝の心を大変美しくあらわしています。神のお望みの世界とは、少数の人があり余る富をにぎり、一方ではるかに多くの人々が窮乏にあえぎ餓死していくような世界ではないことをもはっきりと教えているのです。

誰が前者に属し、誰が後者に属しているのでしょうか。問題は単にこのような二つの正反対の社会に関することなのでしょうか。あまりに狭い枠組に閉じこめる必要はありません。今や問題は実社会全体、すでに色々な形で規定されている世界の〈あらゆる区域〉、におよんでいます。たとえば先進国と発展途上国に分けて語ることもできます。同時に消費社会と文字通り餓死する人々の社会にも触れるべきでしょう。広い観点から、問題を相互に関連づけてとらえねばならないのが現代です。〈閉鎖的な図式のみでは不充分です。〉狭い枠組内での言動はたびたび、開かれた道をむしろ妨害することもあるからです。たとえば、人にとって現実に必要なことよりも、ある党派や組織の勝利を大事にするときにそうなるでしょう。

しかしながら、これらの心要性は、「単なる経済的な問題」や「物質的富の分配」に関する分野のみに限られているのではありません。ほかに人間にとって本当に必要なものがあります。またこのほかに人権が暴威をこうむっていることも事実です。それも単に人としての権利のみでなく、家族や国家の諸権利もそうなのです。「人はパンのみで生きるのではない……」(マテオ4・4)〈単にパンへの飢え〉よりも、時としては、〈真理〉渇望の方が強いのではありませんか。また、〈自由への渇望〉もみられます。なぜなら良心や信教の自由に対する権利、両親や家族の信念や信仰にふさわしい教育の権利、そして政治情勢や暴力によって強いられたある思想によるのではなく、能力に応じた教育を子弟に施す権利のごとき、非常に根本的なもろもろの権利が侵害されていることがあるからです。

正義のためにいさぎよく戦いなさい

人の仕事の世界、つまり大いなる勤労社会は道徳的に堅固な基盤を有していなければならないのです。それゆえ、現代の世界に君臨する不正に対して敏感にならねばなりません。〈あらゆる面で正義のために堂々と戦いうる人〉であるべきです。それは人のまことの善のためであり、個人、家族、国家、人類全体の諸権利のためなのです。この正義こそ、教皇ヨハネ二十三世が回勅『地上の平和』でいみじくも言明された通り、平和の条件であります。非常に高貴なこの戦い、あらゆるところで人間の真の善を追求する戦いに着手できる自由な立場は、マリアの心にキリストがこられたときの、生ける神に対するマリアのあの言葉から派生しているのです。

「その御腕の力をあらわし、おごる思いの人々を散らし、権力者をその座からおろし、低い人々を高め、うえた人をよいもので満た

> 正義への飢えや真理と世界の道徳的秩序のために戦うことが急を要することであっても、それが、憎しみに変わったり、世界に憎しみを引き起こす根源になったりしてはいけません。

説教・講話・書簡等の抄訳

▲若者へのメッセージ▲ 信仰に生きる

し、富む人を空手でおかえしになります。」(ルカ1・51～53)

後日キリストは仰せになりました。「正義にうえかわく人はしあわせである。かれらは飽かされるであろうから。」(マテオ5・6)この正義への飢えや真理と世界の道徳的秩序のために戦うことが急を要することであっても、それが、憎しみに変わったり、世界に憎しみを引き起こす根源になったりしてはいけません。〈他の陣営〉に組みするという理由だけで、その人々に対抗して戦うようなことがあってはならないのです。この戦いが敵を破壊するための計画に変わったり、しだいに共同体にとっての利己主義や〈権力者、破壊者の利己主義〉の表われである社会的、政治的機構を生じたりしてはなりません。これらの利己主義は時として自分の社会や国家を亡ぼし、また何の呵責も感じることなく他をも破滅してしまいます。人間的能力や経済的能力、また文明の面からみてもっと非力な国家や社会の自立心や自主権を奪い去り、かれらの資源を搾取しながら破滅に追いやってしまうのです。

このような状況にあって大いなる勤労社会の人々は、まさにその道徳的基盤にもとづいてはっきりと問いただすべきです。正義と人々の善のため、とりわけ貧しく無視された人々の善のための高貴な戦いが、どこで、どの段階で、なぜ度をすごしてしまったのか。道徳的かつ創造的基盤が、どこで、どの段階で、なぜ、〈憎しみ〉やとてつもない自己破壊の危険性を帯びた新しい形の集団的利己主義という〈破壊力〉へと変わってしまったのかと。

今の代はこのような非常に根本的な問題をなげかけているのです。これは各人の〈良心〉に対する明らかな〈命令〉でもあります。人間一人ひとりと社会全体にとって、特に現在と未来の世界に対して重要な責任を負っている人々にとって必要なことです。この問いかけには、勤労者や勤労社会と、それに全人類のもつ道徳的基盤が表明されるのです。

さらに自問せねばなりません。いかなる権利において、この道徳的基盤や真理のために戦う自由な立場、正義追求への渇望が、神の御子を宿し全霊を傾けて主を礼拝なさった〈聖母のことばから〉、分離せられたのか。なぜ、世界の正義のための戦いが、〈徹頭徹尾神を否定し〉、全人類、全社会に対して無神論を吹きこむ〈計画〉と結びついてしまったのか。

たとえ、〈人間についての充分な真理を知るため〉だけであり、他の動機がないにしても、以上については自問すべきです。内的自由と尊厳、そして歴史全体の名において考えられるべき問題なのです。(…)

いずれにしても、キリスト信者はこの真理と正義の世界建設を、憎しみではなく、ただただ愛の躍動によって始めなければなりません。

聖書のことばを記憶に呼びおこしつつ終ることにしましょう。「愛にはいつわりがないようにせよ。悪をにくみ善に親しめ。兄弟愛についていえば、たがいに愛しあい、尊敬についていえば、各自ゆずりあえ。勤めのことはゆるがせにせず、あつい心をもって、主の奴隷となれ。希望のよろこびをもって生きよ。」(ローマ12・19～21)(仏訪問の時の説教)

(…)それぞれが、そして、共同体全体が深い(宗教的)形成を受けているなら、当然の結果として、具体的な使徒的事業に乗りだすことでしょう。このような道を歩んでおられる大勢のみなさんに心から祝福をおくります。キリストはいま、地上における代理者を通じて、みなさん方をお呼びになっている。ペトロとアンドレア、ヤコボとヨハネ、その他の使徒たちをお呼びになったときと同じように、みなさん方を呼んでおられます。教会の建設と新しい社会の確立をはかるよう招いておられるのです。大勢で主の呼びかけに応えてください。おのおのが属する共同体の中で、仕事を引きうけてください。みなさんの時間、みなさんの才能、みなさんの心、そしてみなさんの信仰をささげて欲しいのです。典礼に活気を与えるために、子供たち、若者、成人を対象とした信仰教育のために、また、大変貧しい人々、教育を受ける機会のなかった人々、身体障害者、孤立した人々、避難民、移民のために、さらに、数多くの奉仕活動に加わるために。それは、また、みなさんの学生としての活動や人権擁護運動に活気を与えるためでもあります。実際、活気にあふれて人生に立ち向かう若者、堅信を受けるみなさんにとって限りなく情熱をそそる仕事がたくさんあるのです。

洗礼後の新しい段階、すなわち世界の福音化という広大な仕事に積極的に奉仕するという段階にいたり、いま堅信の秘跡を受ける若者たちに話しかけたい。按手と聖香油の塗油は、実際に聖霊がみなさん方の心の奥においでになることをしめしています。真理と自由、理想を求めるみなさんの知性に近づき助けてくださるとでも申しましょうか。堅信は、みなさんにとって、聖霊降臨であります。非常に偉大で重要なこの秘跡の意味を味わってください。このさき、みなさんの生活態度はどんなものになるでしょうか。高間から出て来た時の使徒たちと同じになるはずではないでしょうか。祈りと信仰とパンを割くこと、隣人、とくに大変貧しい人人への奉仕、――このようなことに骨身をおしまず働いたキリスト信者たちと同じような生活を送るべきなのです。堅信の秘跡を受けたみなさん、教会と世界のためを考え、若さと原動力の尽きることのない泉である聖霊降臨を熱心に人々に証言してください。

時には、反対され、さげすまれ、からかわれることもあることを覚悟しなければなりますまい。本当の弟子であれば、「先生」よりも楽に生きることなどできません。本当の弟子がになうべき十字架は、豊かな実りを与えるキリストの受難、キリストの十字架と同じなのです。苦しみを捧げれば豊かなみのりをもたらすことは、教会の歴史を通して二十世紀の昔から立証ずみであります。

このような使徒職に精を出しておけば、将来、重い責任に耐えられるだけではなく、しっかりとした家庭を築きあげるために役に立つことを深く自覚してください。しっかりとした家庭なしには、国家が長い間しっかりとしていることはできません。さらに、大切なことに、キリスト信者の家庭は、その一つひとつが教会の基礎となる細胞であります。みなさんの中から、司祭職、修道生活に身をささげる人もでてくるでしょう。(…)(どこの司教区でも、)「さあ、私について来なさい。」というキリストのまねきに、みなさん方が心おしみなく応じることを当然頼りにしているはずです。

(…)聖霊はキリストの弟子たちの愛にあふれた忠実な心のうちに宿る――聖ヨハネはこう保証しています。黙示録にあらわれる新しい世界の平和と希望のうちに、信者の記憶を新たにし、奥深い心のすみずみまで照らすこと――これが聖霊の御働きなのです。

その聖霊御みずからが、私たちを一つにまとめ、父なる神、そして兄弟である人々に奉仕する際に私たちを聖別してくださいますように。キリストによって、キリストのうちに、キリストと共に。アーメン。

不変の教え

神学生へ

キリストの真の弟子として

わたしはあなたたちを友と呼ぶ

1　いまはごミサの途中です。イエズス・キリスト、永遠に変わらぬ大司祭への信仰を、みなが一緒になって告白するには、真にふさわしい機会だといえましょう。また、緊密な教会全体の一致がとくに感ぜられるこの時を、それにふさわしく生きることもできるのです。その準備は、いま朗読された聖書がすでに整えてくれました。たがいの愛をつねに深め、その表われを心のなかでいつもあらたにするように、というものでした。

「わたしが愛したようにあなたたちが互いに愛しあうこと、これがわたしの掟である。友人のために命を与える以上の大きな愛はない。そしてあなたたちはわたしの友人なのである。」(ヨハネ15・12～13)ここで語られているのはキリスト教徒の徴(しるし)というべき愛――罪のくびきを解き放ち、キリストとの親しい交わり、友情へ呼びよせてくれる尊い愛のことです。「これからもうわたしは、あなたたちをしもべとは言わない(……)友人と呼ぶ。」(ヨハネ15・15)えも言われぬ愛、まことになみなみならぬこの愛を十全に語りえたのは、(愛の弟子)と呼ばれる福音記者聖ヨハネだけでした。それは喜びのうちに言い表わされています。「わたしの喜びがあなたたちにあり、あなたたちに完全な喜びを受けさせる、そのためなのである。」(ヨハネ15・11)この自信にあふれた愛は、希望への道をひらき、すべての恐れにまさっている。「あなたたちはふたたび恐れにおちいるために奴隷の霊を受けたのではない。」(ローマ8・15)この愛の住まいは「神の霊によって導かれている人すべて」(ローマ8・14)であり、その人びとは、神の力によって全存在、全活動をとりひしがれ、死から生へと導かれていくのです。世継ぎの子となったればこそ、神に面(おもて)を向け「アッバ(父よ)」(ローマ8・15)と呼びかけることができるのです。

キリストと司祭職を共にする

2　言葉につくしがたく尋常ならぬこの愛は、キリストから溢れて人びとの心に注がれていき、教会に奇跡を起こして若者たちを魅きつけついには、キリストにしたがうという困難ななかにも励みある仕事にとりかかろう、と決心させるのです。愛する神学生諸君、あなたがたはこの愛に応えようとして、生涯をキリストに献げ、その司祭職を共にしようと思い、また決心しもしたのでしょう。これを思えばわたくしの心は、あなたがたへのつよい愛情で一杯になります。考えてもみてください。どんな司教であれ、自分のところの神学校にはあらゆるものがあると胸を張りたい。家族的に親密にさせてくれるもの、学校をその名にふさわしくしてくれるもの、集会を心はずむ活気で満たしてくれるもの、希望に喜びを注ぎ、祈りに熱心さをつぎこんでくれるもの、そうしたものすべてが、自分の神学校にはある、とあらゆる司教は思います。だったら、ローマの司教、全世界に見つめられている万人の牧者の場合は、いかばかりかと思いますか。

知ってのとおり、神学校こそ教区の生命力の表われです。教区で働らく司祭、教育者が一所懸命に打ちこむ目標だといえましょう。そのキリスト教社会に十分な能力がある、というはっきりした徴(しるし)なのです。どういう能力でしょうか。自分たちのなかにいる若い人びと――司祭職に適した性格の若い人びとが、いつの日か、その社会のただなかでキリストの仕事を引き継いでいけるよう、かれらに実りおおい成熟をとげさせることのできる能力。そうした能力をそなえたキリスト教共同体であるというたしかな徴、それが神学校です。また神学校は、徳に富み犠牲心ゆたかな家庭に、子どもを教会に献げるという恵みが降り注いでいることの指標。さらに、時おり投げかけられる暗い影にもかかわらず、現代世界には確実に安定した希望が根を張っているという証拠でもあります。世界のあがないに身を捧げる覚悟の勇敢な若者こそ頼りになる人びとなのですから。(…)

相互愛

はっきりと思い浮かべられるのではありませんか。わたくしの心に湧きあがる優しい思いが、どれほどのものか。キリストの代理者、福音の先ぶれ、神の民の中心にあって真理と兄弟的結び合いとの使者になろうというあなた方の決意を、わたくしは知っており、目のまえにしてさえいるのですから。教皇はあなた方を愛し、特別なものと見て、思いと祈りのなか、絶えずあなたがたのかたわらにいます。あなた方のほうでも、教皇を愛してください。奉仕を捧げようとしている相手の教会を、愛さなければなりません。そしてわれらの主キリストを情熱こめて愛さなければならない。その真の弟子、怠りない模倣者、謙遜な後輩、忠実な友、なにものも恐れぬ証人、疲れを知らぬ使徒となるために。そのようなものに、司祭のつとめを担って「もうひとりのキリスト」たるべく召し出された人は、なりえますし、さらに、信仰、徳、学識、聖性の遺産を、引き継ぎ大切に保ちなさい。なによりも、主イエズスについての心をこめた勉学で、あなた方の精神と心をいっぱいに満たしなさい。

「あなた方のうちにキリストが形づくられるまで。」(ガラツィア4・19)真の司祭となるには今日、世界に対して信・望・愛の対神徳を証することが、いまだかってないほど必要です。逆にまた、そうすれば、身につけた対神徳から、司祭職の準備に心がける者の身を飾るべきすべての徳が、自然と生まれ出て来ることでしょう。

3　祝せられたもう信実の聖母、天の守護者なる元后が、あなた方の形成に力をかし、支えとなってくださるように。この神学校の信心ぶかい伝統のひとつ、日々のロザリオの祈りのなかで、また「マーテル・メア・フィドゥチア・メア(わが母、わが信実)」のみじかい祈りのなかで、あなた方は毎日うまずたゆまず聖母を呼び求めていくでしょう。聖母はかならずあなた方を守ってくださる、助けてくださる。神の祭壇にいたる道筋で困難におちいったそのつど。(一九八一・十・二十二)

われらの主キリストを情熱こめて愛さなければならない。その真の弟子、怠りない模倣者、謙遜な後輩、忠実な友、なにものも恐れぬ証人、疲れを知らぬ使徒となるために。

『教皇様の声』　ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙　■毎月　十日発行　■定価　一部六十円送料六十円　■一年予約七百二十円送料七百二十円　■二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替　神戸　3-72393